

2012年 研究旅行報告書

12AR002 江崎泰章

12AR149 田上隼也

# チベットに残る独自宗教の力 ～チベットの都ラサを訪ねて～



2011年9月3日～12日  
中国（西寧・ラサ）

### 研究旅行の目的

「チベット仏教にまつわる寺院・宮殿からチベットの人々の国民性を読み取る」これが、今回私たちが企画する研究旅行の目的である。現在、中国の一部として認識されているチベット。中国側は、昔からチベットは中国の一部だと主張し、チベットは様々な点で中国政府の圧力も受けている。しかし、清の滅亡後、中国政府の実効支配が及ばず、チベットは事実上独立国家として存在していたとも言える。また、身体的特徴・気質・生活様式という点においても一般的に私たちが中国人と呼んでいる「漢民族」の人たちと比較すると異なっている。それに加え、いくつかの文献を読んでいると、現在でもチベットに住む人々は、独自のアイデンティティや文化を持ち、独立国家の国民でありたいと考えている人も多いようである。そこで今回の研究旅行では、チベットの独自の文化として有名なチベット仏教に焦点を当てる。チベット仏教の祈りの中心ラサにはチベット仏教にまつわる寺院やポタラ宮を代表とする宮殿などといったチベット独自の建築物がいくつか存在している。それらの外観・様式・色遣い・絵柄などを実際に自分達の見ることによって、それぞれに共通する点や異なる点、またチベットに対するどのような気持ち・魂が込められているのか、昔の人々が建てた寺院や宮殿は現在チベットで生活する人々にどのような影響を与えているのか、現地人にとってそれらの建築物の存在価値はどのようなものなのかの読み取りたい。

### 期待される成果

代々受け継がれてきたチベットの象徴とも言うべきチベット仏教、そして昔の人々によって建てられたチベット仏教にまつわる寺院や宮殿が現代の人々に与える影響、その影響力の大きさを肌で感じたい。日本はほぼ無宗教の国で、私たち自信も宗教に対する信仰心は薄い。しかし、政治の中心にも宗教理念を反映させるほど信仰心の厚いチベットにおいて、私たちの宗教に対する思いとの差、チベットの人々にとっての宗教の偉大さというものを感ずることができる。また、中国政府は情報の提供に関して大変厳しく、都合のいい点しか公表しないというイメージがある。人々の生活の中に足を踏み込むことで、チベットにおける中国の影響力の拡大、チベットの人々の中国に対する反抗的な態度という両サイドの視点から、中国政府はチベットに対してどのような事を行っているのか、また、チベットの人々は中国に対してどのような事を行っているのかを観察し、日本には知り得ることのできない現在の中国とチベットの関係を知ることができると考えている。ラサには欧米人や日本人も滞在しているということなので、チャンスがあればそのような中国人以外の人達からチベットに対する考えや、ラサに来た理由などを聞く事ができる可能性もある。また、卒業論文の為の研究としても意味を為すとも考えている。

●日程

	滞在地	行動・調査内容
第1日目	西寧	福岡→上海（乗り継ぎ）→西寧 （西寧泊）
第2日目	西寧	青海湖
第3日目	西寧	タール寺 午後：青海チベット鉄道にてラサへ
第4日目	ラサ	午後：ラサ到着
第5日目	ラサ	午前：ポタラ宮 午後：セラ寺・大昭寺
第6日目	シガツェ	ギャンツェ経由でシガツェへ タシルンポ寺
第7日目	ラサ	ラサへ 薬王山・小昭寺
第8日目	ラサ	ノル布林カ
第9日目	ラサ	ラサ→成都（乗り継ぎ）→上海
第10日目	ラサ	上海→福岡

●成果報告

私たちが実際にチベットという未知の世界へ足を踏み入れてみて、行く以前に思っていた事と正しいこと、また異なっていること、新たに気付いたことなど、様々な事を感じることができた。

まず、チベット族の人々は、やはり漢民族の人と比較すると、全く異なる人種だという事である。西寧からラサへ向かう鉄道の中から、異世界な空間が広がっていた。西寧には

漢族が多く、一般的に言う中国人ばかりを目にしていたし、同じ車両に乗っていた中国人もおそらく漢族の人々であった。しかし、少し鉄道内を探検しようと思い、隣、またその隣の車両へ行ったところ、今まで見ていた人とは明らかに顔つきが異なる人々の姿が広がっていた。少し赤みがかかった肌をしていた。服装も民族衣装を着ている人が所どころ見られた。ラサに到着した後も、民族的な家屋や建物、タルチョというチベットを象徴する旗が多く目にとまった。ガイドの方に話を聞くと、チベット族の人々は、冗談が好きで、明るいということである。実際ラサで行ったレストランでも店員から話しかけられ、仲良くなった。

次に、大きなテーマとしていた「独自宗教の力」というものだが、これは本当にチベットの人々にとってなくて



(タルチョ)

はならないものだと感じ、また、多くのお寺や宮殿をめぐる、過去から現在まで、チベット仏教というものが人々にいかに信仰されているのかを感じることができた。実際に行った寺院は、西寧のタール寺、ラサでのセラ寺、大昭寺、小昭寺、デプン寺、シガツェでのタシルンポ寺。宮殿は、ポタラ宮とノル布林カである。現地のガイドにも言われたのだが、内装はどのお寺、宮殿もほとんど同じである。外装もチベットの色である赤が基調として建てられている。日本でいうお寺は基本的に建物が1つあるだけだが、現地のお寺というのは、たくさんの建物がああり、霊塔、仏像の建物、お坊さんの修行する空間、また、お寺で多くのお坊さんが生活しているため、キッチンや寮もあった。したがって、敷地面積を考えると、日本のお寺よりははるかに大きい。

どのお寺・宮殿にしてもそうだが、現地の人々は、毎日建物の外側・内側をマニ車を回しながら歩き、ところどころに御賽銭を置き、また、頭をドアや柱に付けるなどして礼拝をおこなっていた。また、五体投地をする人々の姿も多く見られた。



(マニ車と霊塔)

現地ではろうそくの代わりにバターを使っていて、巡礼する人々は持参したバターをお寺のろうそく台に注いでいた。巡礼する人は、幼い子供からお年寄りまでで、小さい子供が

真剣に手を合わせたり五体投地をする姿に衝撃を受けた。私たちは何かきっかけがないと、お寺に行ったり、仏壇に手を合わせたりはしないが、チベットの人々は毎日、朝から夜までずっと礼拝を行っている人が多くいるということであった。チベット仏教が人々にとっていかに重要なものかを感じることができた。



(五体投地をする人々)

最後に中国共産党との問題に関してであるが、私たちが宿泊したホテルは、2008年に暴動が起きた通りに面していた。現在は建物も修復されていたが、当時ほどの建物も壊れていたということである。また、現在でもラサのあちらこちらで軍人・警察官が人々を監視しているため、決して普通の街ではなかった。

研究旅行へ出発する以前は、チベットは中国から侵略され、中国の文化、生活を押し付けられているというイメージを持っていた。そして、今でも独立を望んでいる人が多くいるのではないかと感じていた。街中でこのような話をすると、捕まってしまうという情報があったので、専用車での移動中にガイドの方に話を聞いた。実際には、ダライラマが統治していた時代までは奴隷社会であったため、チベットの人々には自由がなかった。共産党が治めるようになってからは、人々に自由・仕事を与えられたため、一部のお坊さんを除き、一般のチベット人は共産党に感謝していて、その象徴が家の上に中国国旗を掲げていることだという事であった。その話を聞いて、確かに納得しようと思えばできるものであったかもしれない。しかし、ラサのあらゆるところに「共産党万歳」「祝共産党成立90周年」などといった看板があること、ポタラ宮の上に中国国旗が掲げられていることが不自然に感じてならなかった。また、その話をしてくれたガイドの方が漢族の方であることを考えれば、鵜呑みにすることができなかつた。また、チベット族の民家の上に掲げられている国旗も、本当に現地の人が望んで掲げている



「祝中国共产党成立90周年！」

のか疑問であった。それから、本当に人々が共産党に感謝をして生活しているとするな

らば、街中で軍や警官が人々を監視する必要もないのではないかと感じた。これらの実態を知る一番の方法はやはり現地の人に話を聞く事であるが、上でも述べたように、街中でそのような政治的な話をすれば捕まってしまうため、インタビューを実施することができなかった。

## ●まとめ

今回は標高が高い土地への旅行ということで、2人ともやや高山病の症状にも見舞われたが、実際に現地へ行かないと感ずることができないチベットの魅力・問題を肌で感ずることができ、大変貴重な経験になった。このような機会を与えて頂いたことに本当に感謝しなければならない。日本人として生れたため、チベットに関して無関心で生活することもできるが、今回こうして興味を持った以上、もっとチベットに関して勉強しようと感じた。多くのお寺などを案内していただいて、たくさんの上史上の人物の名前がでてきたが、正直そこだけではすべてを記憶することができなかった。

中国共産党との関係についても、どちらの主張が正しいのか、今回の旅で確かな情報を入手することができなかった。今後この問題についてどのような情報が得られるかは計り知れない少しでも、自分達が納得できるような情報を探し求め続けたいと感じた。

そして、チベットの人々にとって、チベット仏教がいかに重要なものかという事に関して、私たちが寺院や宮殿、居住地を巡って実際に肌で感ずた人々の様子などをより多くの人に伝えて、自分たち自身も今まで以上に知識を深めていきたいと思う。



シガツェのタシルンボ寺



ラサの小昭寺